

# 史遊会通信

No.214  
平成24年11月16日  
発行

事務局  
☎(03)3712-0651  
下山田方

例会のお知らせ

◎ 11月例会

日時 平成24年11月28日(水)  
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室

討論会 「私の邪馬台国」  
司会 中山喬央氏

自由執筆 「今年感動した三冊の本」  
全員(友の会員も含む)

字数 20字75行(題字込)以内  
締切 11月30日厳守

◎ 12月忘年会

日時 平成24年12月12日(水)  
午後6時～8時

会場 学士会館  
会費 七千円

出欠のご返事は11月30日迄

自由執筆者は未確定なので次号でお知らせします。

独裁者は決して恐怖のみで国家を支配したわけではなかった。そこには巧みな政治技術、国民の劣情を刺激する宣伝、側近の心をつかむ人心掌握など、様々な手段が存在した。  
彼らがいかにして政権を握りいかにしてそれを維持させてきたのか、を見て行きたい。ヒトラーが政権獲得をした背景には、大きく分けて二つの要素がある。

まず経済的理由。第一次世界大戦で敗戦したドイツは、G.N.P.の二十五年分に相当する賠償金を払う破目になった。勿論一度に払える額ではない。もし第二次世界大戦が起きな

ければ、ドイツは一九八八年まで巨額の賠償金を払い続けなければならなかつたのである。  
賠償金の影響もあって、ドイツ経済は事実上破綻。驚異的なインフレによって、なんと「一〇〇兆マルク札」まで刷られた。為替は一ドルが四兆二千億マルク。これではまともな経済活動ができなくなる。

ヒトラーが政権を獲得した背景の二つ目は、政治的理由である。

ドイツは国土割譲のみならず、軍備を持ってない二流国扱いをされ、国民のプライドは大きく傷ついた。加えて、ワイマール共和国政

府には政治力、統治能力が欠如していた。たとえば共産党の台頭を右翼政党や旧軍の勢力によって抑えるなど、政府自身がまともに統治を行わず、国家は常に不安定であった。

そこに、ヒトラー率いるナチス（国家社会主義労働党）が現れた。

「ドイツよ、目覚めよ」

ヒトラーの演説は、いつも同じ論旨が繰り返された。

ヒトラー自身、第一次世界大戦で戦傷を負つたこと。ドイツを破壊したベルサイユ条約への攻撃。ドイツ敗戦に暗躍したユダヤ人や共産主義者への呪詛。そして最後は、ドイツは偉大であり、ドイツは目覚めなければならない、と獅子吼えする。

彼は演説を、巧みな演出によつて効果的に浸透させた。まずヒトラーが登場するときには、バーデンワイラー行進曲が演奏される。部下を従えて、群衆の中央を進む。演壇に登つて、聴衆が静まり返るのを辛抱強く待つ。戦の様子を語り出す。

聴衆は何度も「ヒトラー万歳！」と叫んで、演説を中断させる。ヒトラーもそれに応え、徐々に調子を上げていく。やがて会場は

興奮の坩堝と化し、涙を流す者さえ出る。

だが演説を聞き終え興奮が冷めると、聴衆は、いまヒトラーが何を語ったのか思い出せなかつたという。

なお、ヒトラーは聴衆がベルリン大学のインテリ学生であつた場合などは、絶叫することなく、静かに語りかけたという。相手によつて語り方を変えることができたのである。

いずれにしても、ヒトラーの弁舌は弱小政党を巨大政党に成長させる主要な武器ではあつた。

もちろんそれだけで政権を握り得たわけではない。たとえば政治宣伝という分野では、以下のよう斬新な取り組みが見られた。

当時の政治ポスターは、一面に細かな字でびつりと政党の主張が書かれていたが、ナチのポスターは違つた。ある時「アメリカ皇帝ベルリンにて演説す」と大書したポスターが貼られた。一体何のことか？まず目を惹かせ、中身を読ませたのである（内容は、アメリカによる経済侵略を批判したものであつた）。また、「攻撃」という新聞を宣伝する時には、まず赤字で「攻撃」と書かれたポスターを貼り、しばらくして「攻撃は〇月〇日に開始される」というポスターが掲示され

る。最後に、「攻撃」が新しい新聞だということがわかる内容のポスターを貼るのである。

これは、自動車の宣伝で最初にテールランプだけ大写しにして、「発表は〇日」などと予告する現代の広告手法と同じである。つまりナチの政治宣伝は、善悪は別にして技術的には最先端を行つていたのである。

ナチの宣伝責任者で後の宣伝大臣であるグッベルスは、次のように述べている。

「望ましい結果を生む宣伝はみな良い宣伝で、それ以外はみな悪い。たとえそれが、どれほど面白そうなものであつたとしても。なぜなら宣伝の目的は人を面白がらせることではなくて『好結果を生む』ことであるから。それゆえに一つの宣伝をして、これは粗野だと下品だと野蛮だと公正を欠くなどと批評することは見当違いも甚だしい」

ナチは国民にウケるためにどんなウソも言つてのけた。たとえばドイツ有数の工業地帯であり豊かな炭田もあつたザール地方。第一次大戦後、国際連盟の管理下に置かれていたが、一九三五年に住民投票で今後どうするのか決定されることになつていて。グッベルスは大量のラジオをザール地方に

無償配布し、投票当日に「反ナチ運動家がザール地方から逃亡した」とウソの放送を行つた。「ドイツ復帰を目指すナチ支持派が勝利しそうだから、反ナチ運動家が逃げた」と住民に思わせるためである。結果は、「ドイツ復帰希望」が九十%を超えた。

このように悪辣な宣伝行為も辞さず、国民が聴きたがっていることを語り、ユダヤ人を攻撃して劣情を煽り、暴力もふるい、ナチは政権を握る。

## 祝出版

瀧澤 中著

### 『惡魔の政治力』

独裁者がいたらあなたも操られる

定価八〇〇円+税  
経済界新書

ないが、眞面目にコツコツ働いて、それなりの暮らしと社会的地位を手に入れたが、敗戦後すべてが失われ、誰も手を差し伸べてくれなかつた層である。

実は、独裁者たちはこの「見捨てられた層」を支持基盤とすることが多い。たとえば毛沢東は、当時国内の七、八割の人口を占めた貧農を背景とした。中国共産党は草創期、ソビエト共産党支配下にあつたため、都市労働者を中心に組織されていた。地方軍閥は地方を支配しあるいは資本家と結び、都市商工業者は国民党などが利益を代表し、都市労働者は共産党の支持基盤となつた。が、農村、

特に貧農は政治的利益を代表する政党がなかつた。

毛沢東は農村に拠点を置き、やがて共産党的な主導権を握つて中国全土を支配する。組織の中でのし上がるタイプとしては、ソ連のスターリンが挙げられよう。

共産主義国家で「書記長」が事実上のトップであるのは、スターリンがソ連共産党書記長であったからだ、というのが通説になつてゐる。本来書記長は会議の議事を記録し、まとめる係の長でしかない。實際、スターリンはレーニンのもとで、雑務を含めたデスク

ワークにいそしんでいた。

が、「雑務」の中身が大切であつた。スターリンの「雑務」とは、党地方支部の幹部に誰が適任か、誰を解雇すべきか。資金を調達し、だれにどう配るべきか。つまり、人事と金を掌握したのである。

雑務につきものの調整で、組織内の誰が頼りになるかもわかつた。スターリンは、書記長になつたことで党と政府について精通したのである。

スターリンは、書記長として得た人脈、盗聴などによつて得た情報を総動員して、肅清を行う。

政敵はもちろん、自分の支持者、親友までも毒牙にかけ、軍人に至つては、五人の陸軍元帥のうち三人、十六人の司令官のうち十五人、海軍は八人の大将全員が処刑され、大佐以上の軍幹部の実に六五%が肅清された。

無実の国民も標的にされた。わずか十歳で三年前の、つまり七歳の時の反逆罪を「自白」させられたり、工場勤務の遅刻で収容所送りになつたり。ソ連国内には多くの強制収容所ができ、国内最大の「企業」となつて、タダ同然で生活用品から建築資材などあらゆるものを作成させられた。彼らを逮捕したり

処刑した秘密警察の長官二人も処刑される、という異常な国家であった。

国民は互いに監視しあい、疑心暗鬼に陥らせる。そうすれば人々は連帯できない、というのが、スターリンの考えであった。

毛沢東は自身の政策の誤りによって、史上最大規模の数千万人の餓死者を出し、それを糊塗するために政敵をつくつて追いつき落としたため、常にナンバー2は生贊になつた。ポル・ポートは単に紙に数字を書き、地方の

収容所に送つた。その数だけ人を殺せ、といふのである。

金日成はスターリンの手法を真似て、肅清を繰り返した。彼は自分の手を汚さず、肅清する人物と同じ派閥の人間を手なづけ、同じ派閥の者同士で肅清をさせた。

彼らの手法は、私たち自由民主主義国家の政治にはなじまない。しかし、政治はここまで人を殺すことが出来、権力を私物化できるということを、彼らは教えてくれる。

若くして留学し今や唐の高官に栄達した彼がやつと朝廷から許された故国への出張だった。然し嵐に遭遇し帰国できず、長安に舞い戻つて一生を終えることになる。

一方紀貫之は九三五年、土佐日記に「なまろのぬし……よめりけるうた『あをうなばらふりさけみればかがなるみかさのやまにいでしつきかも』とぞよめりける」と書いた。

冒頭の歌が載る古今集は勅命により貫之らにより九〇五年に編まれた。古今集と土佐日記の刊行年の差は三十年しかない。この三十一年の間に天の原が青海原に変つて了つた。貫之の單なる記憶違いによる誤記であろうか。

これについて漢学者村上哲見博士は「貫之は古今集の編者なのであるから、もともと天の原とあるのを知らぬ訳はなく、土佐からの海路の日記に相應しく改めたのであろう（漢詩と日本人・講談社）」という。この見解が文学界の通説となつて久しい。

然し果たしてそうであろうか。貫之ともあろう十世紀を代表する文人が、こんな軽い気持ちで大先輩の歌を改作し著述するであろうか。私は独断と偏見で青海原が正しいと思う。

### 自由執筆

#### 阿倍仲麻呂の望郷の歌

「天の原…」は「青海原…」が正しかった

#### 鯨游海

天の原振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

百人一首や古今集で有名なこの歌は、国際的に活躍した最初の日本人ともいえる阿倍仲麻呂が七五二年秋、第十次遣唐船で帰国を待つ一夕、蘇州の海岸で詠んだものである。

彼は七一七年渡海以来、常に長安、洛陽の中原に居て海を見る機会はなかつた。三十年ぶりに帰国すべく海岸に到り、目路の彼方に故国を見た。大海原を眼の当りにした瞬間感動が迸り出た。青い海、水平線に浮かんだ月、その下に在るであろう三笠山。視線は水平で、捕えた物は具象であつた。長安で見慣れた抽象的な空ではなく、青波躍動する青海原であつた筈だ（放け見る=遠くを見る）。

次に「天の原振り放け見れば」のフレーズ

は既に山部赤人によつて詠まれていた。即ち  
「天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河な  
る不尽の高嶺を天の原振り放け見れば渡る日  
の影も隠らひ照る月の光も見えず……」なる  
長歌。「田児の浦ゆうち出でて見れば眞白に  
ぞ不尽の高嶺に雪は降りける」と繞く反歌。  
万葉集に載る推定七三〇年頃の作で、日本  
に居ない仲麻呂が知つている可能性は先ず無  
い。では偶然の一一致であろうか。凡そ句中の  
十二字が偶然一致する確率は、極めて稀であ

自由執筆

出雲大社再考

## 出雲国造家分裂の史実

出雲大社（明治時代以前は杵築大社と称す）の祭祀を執ってきた出雲国造家は天穗日命（天照大神の第二子神）を始祖とし、五十五世まで一統で続く家系であった。しかし南北朝期後村上天皇の興國四年（一二三四三）十五世長男清孝病死後、その繼承を巡り二男孝宗（千家家祖）と三男貞孝（北島家祖）の

間に争いが生じ、ついに二家に分裂し現在に至っている。

この分立の経緯について、現宮司である千家家は次のように説明している。

「興国四年二男孝宗が国造になつたが、弟の貞孝が時の出雲の実力者塩谷判官高貞の女が生はるゝが、その実力と旨長ニ別アシテ

生母の子の冥方に背景は別家いた  
とし、当家が本家としている。これらを裏付  
けるものとして、五十五世長男清季の神主義

並びに所領の譲状、兄弟三人の生母である妙  
善の書状が保有されてゐる。大土の親宮同甘

千家家であることや、弟の三男貞孝より兄の二男孝宗が継ぐのが尤もであることから、今

日では千家家が本家と思われていて、

男貞孝が家督相続した家系であり、当家が本家であると主張する。五十五世の兄清孝は父から一期限りとして相伝したものであり、死亡と同時に貞孝が承継したとする。北島家にはこれらを証する五十四世孝時譲状、祖母覚日書状、塩谷高貞下知状が残されている。

兄五十五世から引き継いだ千家家と父五十四世から引き継いだ北島家のいずれを正当とすべきであろうか。

この問題を解明するには、五十三世祖父泰孝の時代に遡る必要がある。泰孝から長男

る。つまり天の原でなかつた蓋然性が極めて高い。

もある青海原とあつた原作を善意で天の原に改めて発表したと考えられないか。

史  
上

更に仲麻呂は、この時嵐で帰国出来ず、歌  
が記された料紙だけが誰かに託されて帰国し  
た。船団四隻の内三隻は帰国を果してゐる。  
他の船に乗つていたその誰かが、帰国後この  
歌を披露するに際し、当時既に人口に膾炙し  
ていた赤人の句を意識した。つまり「振り故  
け見れば」の上の句は「天の原」が恰も枕詞  
のように定着し耳慣れていたので、字余りで

貫之は、ある時仲麻呂の肉筆の料紙を発見  
青海原と書かれているのを確認したが、勅命  
で自ら編纂したものを作成する訳にもい  
かず、土佐日記に記すことでせめて眞実を後  
世に伝えようとしたのではなかろうか。  
日記には「……よめりける」「……とぞよ  
めりける」と不自然な程重ねて強調してい  
るではないか。

孝時への譲状に、三人の孫の中で末子貞孝だけに財産の一部が贈与されており、五十三世の時代から既に孝時の後は三男貞孝を後継者とすることが決められていたものと推察される。

次に父孝時の譲状には三男貞孝に家督を繼承せることが明記されている。この辺りの事情は江戸期の地誌『懷橘談』に詳しい。

「孝時に三子あり、嫡子清孝、多病にして子なく、千家祖孝宗は不肖にして父に従わず、故に北島祖貞孝、家督を繼にぞ有ける、時清孝が母孝時を諫めて曰、清孝は多病也といえども嫡男の為、願いは一代神職を繼て貞孝に神火継しめ給へかしと、孝時之を諾す、建武三年清孝神火を繼て、後に父の命を背き、当職を二男孝宗に譲る、」

これらを裏付ける譲状があり、しかも父の生前建武二年の日付から判断して、北島家相続が史実であり正当であろう。

また千家家では貞孝を祖父母の子とみており、その為祖父から兄一人を差し置いて後継者にされたとしている。しかし残された文書は、三人の母は五十四世孝時の妻妙善としていること、及び最終的に貞孝を後継者と決め

たのは父孝時であることから、この主張は受け入れ難い。こうした分立の事情から、千家家は本家たる根拠として、専ら大社重要祭祀を担当していたことを強調するのである。

千家家には守護代山名家が、北島家には官塩谷氏が各々支援したことから、最早一統化は困難となつた。かくして大社祭祀の主導権を巡る本家争いが以後長く続くのである。

たのは父孝時であることから、この主張は受け入れ難い。こうした分立の事情から、千家家は本家たる根拠として、専ら大社重要祭祀を担当していたことを強調するのである。

#### 自由執筆

熊野三題 その二  
「熊野神社」

平山 善之

朽ちはてぬ 名のみ残れる恋が窪  
今はたとふも 契りならずや

万葉仮名を使って書かれており、読みにくいかが、詠者は聖護院道興准后、筆者は有栖川熾仁親王とある。

聖護院道興准后という人は、左大臣藤原房嗣の子で、聖護院の門跡をつとめた。

文明十八年（一四八六）の六月から約十ヶ月間、北陸から関東、駿河、甲斐、奥州松島まで旅をして、「廻国雜記」という紀行記を書いた。名所、旧跡を訪ねては和歌や漢詩を詠んでいた。その中に「恋が窪といへるところにて」と題して詠んだのが右の歌で、明治

は間違いあるまい。この神社は六月三十日に「水無月払え」、別名「夏越しの払い」を行っている。拝殿前に茅の輪をしつらえ、参詣人は二回この輪をくぐり、「なご」しの払い、する人は、千歳の命延びというなり」と唱える。宮司が祝詞をあげる。半年間の悪を払はい、あと半年の無事を祈るという行事だが、今は珍しくなつた。

この神社の境内に石碑が一つひとつそりと建つていて、和歌である。

以降誰かがこの境内に石をたてたのである。有栖川宮は慶応の征東大総督、明治になつて參謀総長など務めた人。碑文を揮毫した顛末は不詳である。

私は、道興という人は、単に東国名所めぐりに来たもの、と思っていたが、実はそうではなくつた。彼が門跡として首座にあつた聖護院は、熊野神社と深い関係のある寺であつた。

熊野信仰が盛んになつたのは、平安時代に、宇多上皇が初めて御幸されて以来、と言われる。白河上皇の御幸に先達をつとめた園城寺の増譽という僧が洛東に聖護院を賜り、境内に熊野三所権現を勧請し、修驗道の鎮守とした。

その後、後白河法皇の皇子、静慧法親王が第四代住職となつて、宮門跡として勢力を張り、熊野三山検校を兼ねた。以来何人の皇子が宮門跡を勤め、聖護院は修驗道における中心的地位を確立していく。道興も皇子ではなかつたが太皇太后、皇太后、皇后に次ぐ准三后という高い位に補せられ熊野三山及び新熊野検校、園城寺長吏に任じた。時の後土御門天皇や足利将軍の加持祈祷も勤めた。

この文明十八年という年は応仁の乱後九年、都はまだ焼け野原であった頃、関東は太田道灌が主君上杉定正に殺された年でもある。その東国巡回にどんな政治的意図があつたかは記録にないが、熊野三山検校として各地の熊野神社を巡察して歩いたことは確かである。恋ヶ窪の熊野神社もその道程であつたのであろう。そして遊女の故事を聞き感興を催して詠んだとみられる。

ところで、聖護院は仏教の寺であり、熊野神社は神道である。熊野三山は熊野権現とも言われる如く、神であると同時に仏でもある。本宮の祭神は家津美御子大神、本地仏は阿弥陀如来、新宮の祭神速玉之男神、本地仏は薬師如来、那智大社の祭神伊邪那美大神、本地仏は千手觀音、ということになつてゐる。従つて修驗道、山伏というのは祭神、本地仏の双方に仕えている。

この神仏習合、或いは本地垂迹という理論は、いつ頃、そして何人が唱えだしたものであろうか。

仏教を積極的に導入したのは蘇我一族や聖徳太子で、六世紀半ばと言われる。また、それは文献上のことでもつと早くから伝わって

いたという説もある。いずれにしても伝来後百年も経ないで、両者の融合が図られていて私は推定している。そして共通基盤が両者間にあつたにしろ、中心となつて融合を推進したのは藤原氏ではなかろうか。藤原氏は元來、大和王権にあつては祭祀を司る家であつた。神道の元締といつていい。であればこそ、習合説を言い出しても反対を受けない立場であつた。

平城京建都は七百十年、仏教を国是として政治は進められた。時の権力者藤原一族は、氏寺として興福寺、氏神として春日大社を奈良に造営した。

仏教上の諸菩薩、如來たちはみな日本の固有の神様となつて日本に天下つてきたという説は、藤原氏に最も都合が良く、政治的にも必要だつたのではなかろうか。

明治となり、藤原氏が名実共に権力を失つた時、「廢仏毀釈」運動が起きたのは象徴的である。

自由執筆

## 越後国・佐渡国「一宮」考

諸橋 奏

新潟県には「一宮」が三社ある。越後国の弥彦神社と居多神社、佐渡國の度津神社である。

昭和一桁世代は「一番始めは一宮」の歌を歌い、地域神社に詣でて、国家神道絶対の青少年期を過ごした。一宮は全国六十七カ国、九十六社。

弥彦神社は西蒲原郡弥彦村にあり、祭神は天香山命。地元では「おやひこさん」と親しまれ、神体山も万葉の昔から弥彦山と呼ばれていた。が、弥彦山の主峰は神劍峰（六三四）。古来日本海を航行する船の目印で、海の守護神として崇敬された。諸説あるが、人々は神体山の人格神に海の神おやひこ（大屋彦命）を当てたのだろう。

大屋彦命（別名五十猛命）は素戔鳴尊と櫛稻田姫の子で、新羅から樹木をもたらし、造船技術を教えた海上安全の海神。天香山命（別名高倉下）は五十猛命の弟饒速日命（別名天火明命）と天道日女神の子で、越後国の開拓神。野積の浜（現長岡市）に上陸

し、地元民に漁労、稻作などを教え、弥彦山に祀られたという。この社祭神の社撰については、江戸初期の神道家橋三喜（一六三五）（一七〇四）が係っている可能性が高い。神体山の神劍峰と高倉下の靈劍師靈（神武天皇はこの靈劍で国土を平定したという神話）とが継がってのことだろう。当時の弥彦神社は橋家神道を信奉していたことからも十分考えられる。

祭神の社撰といえば、度津神社祭神の五十猛命、配祀として妹の大屋津姫命と抓津姫命を決定したのは橘三喜といわれている。

度津神社は佐渡市羽茂町にあるが、かつては海岸寄りにあつたという。当社はその名「度（わた）」が全てを語っている。「わた」は朝鮮語のPATAと同源で、「海」の意。海神や山祇は、日本民族の自然に対する目に見えない神の働きへの崇拜を示す原形であり、佐渡の他にも要所に海神が祀られている。日本列島は海流に囲まれている。黒潮は南西諸島の北で太平洋側の本流と東シナ海北上の支流に分れ、その支流は更に五島列島附近で東鮮暖流と対馬海流に分かれる。この対馬海流は対馬海峡、隱岐海峡、能登半島、佐渡ヶ島を通じて津軽海峡にいたる。その道筋

に、対馬一宮海神社、隱岐国一宮由良比女神社（元名・和多須神）が鎮座している。

又列島の日本海側は古代日本の表玄関で、佐渡島には「蕭慎人の漂着」（欽明紀）、

「渤海國使の来島」（聖武紀）などが珍しくなかつた。日本海は沿海州、中国東北地区、朝鮮半島、日本列島の人物・文化的交流の共通の内海で、海の路であった。

居多神社は上越市五智にあるが、慶應二年の地変までは居多ヶ浜にあつた。当社の本来の社名は氣多で、本宮は羽咋市の能登一宮氣多大社。その主祭神は大己貴命である。

上代「越の国」は一国であつたが、畿内勢力が及ぶと、前・中・後に分割され、更に養老二年（七一八）に越中國を割つて能登国を分国、氣多大社は能登一宮になつた。各國は大社から勧請、氣多神社を称するものは越中國をはじめ数社に及ぶことになる。抑々氣多大社は大国主命が出雲を出て因幡の氣多岬経由で能登に渡つたので氣多の社名になつたといふ。かくの如く日本海側、山陰道八ヶ国、北陸道七ヶ国の祭神は出雲を元とする国つ神系と更に付言すれば朝鮮からの渡来神とで占められている。今後の発掘への期待も籠め、日本海文化は古代史の宝庫である。